
陰から光へ放り出されて...

kan_sta_ku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰から光へ放り出されて…

【Nコード】

N4340X

【作者名】

k a n | s t a | k u

【あらすじ】

普通の少年を振る舞って、自分がイレギュラーであることを隠していた少年がある事件のせいで公となってしまう

そんな少年はいろんな出会いで何を思い何をするのか…

シリアスっぽい感じが少しありますがそこまでシリアスはない予定です… たぶん

感想、アドバイスなどもらえると嬉しいです

「prologue」

「んっ…っう」

1人の少年が目を覚ました

「こっ…どっ？」

少年は辺りを見回す

部屋にはベッドとトイレ以外何も無い

「誰か居ないのかな？」

少年はベッドから降り、扉のほうに歩いていく

扉はセンサー式のようなが、反応せず全く開きそうにない

「僕はなんでこんなところにいるんだろう」

少年は思い出そうとしてみるが、思い出せない

知識は思い出せるのに、自分が何者なのか思い出せないのだ

この世界においてイレギュラーであるということを除いて…

その時、小さなモーター音が聞こえてくる

通気ダクトから小さな機械が飛んで入ってきた

少年は咄嗟に身構える

「そんなに身構えないでよー」

どこからか声が聞こえてくる

少年は辺りを見回すが部屋の中にはだれもいない

「ここだよ！！ここ！！…あ、そっか忘れてた、ほいっと」

機械が展開しモニターが現れた

モニターにはうさみみをつけた女性が移っている

「……………誰？」

「ええええ！？こんなときに冗談言つの！？しーくん！！」

「……………？」

「えーと？志季くん？如月志季くーん？私だよ？東さんだよー？」

「東…さん…？…え？…あつ、あああ！！思い出した！！もう僕のこと忘れてると思ってた」

「そんなわけないよー！！突然行方不明になってビックリしたよ…」

そんな事より助けに来たよ!~」

「助けに? どうして?」

「しーくん!!なんでそこにいるか分かってる!?」

「えーと……うつ!~!」

志季が突然うずくまる

「ちよっ!!しーくん!?」

志季は気を失って倒れた

1年前……

志季は買い物の帰り、電話で話しながら歩いていた

『しーくん!!ちゃんとこの前渡したペンダント持ってる!?』

「大丈夫だよ、ちゃんと首から下げてる」

『いつもちゃんと持っておいてよ!?』

「はい」

『しーく……は………に………れて………』

「あれ？もしもし？…切れちゃった……ん？」

志季が辺りを見回すとスーツを着た男2人女2人に取り囲まれていた

「僕に何か用？」

「ええ、私たちと一緒に来てくれないかしら？」

「…………いやだと言ったら？」

「力ずくで連れていく!!！」

男2人が志季に襲いかかってくる

「くっ!!…なんなの!!？まったく!!！」

志季は先に殴りつけてきたほうの腕を掴んでひねり、地面に投げつけ、気絶させる

もう一人のパンチを受け流した後がら空きになった腹に膝蹴りを入れダウンさせる

「さすがは如月志季くんってところかしら」

「何を知っている？」

「情報は割と簡単に手に入るのよ……と答えておくわ」

「…………何が目的？」

「あなたの才能を調べるなど…」

「それだけじゃないでしょ？」

「さすが、天才は違うね」

「天才って言うな」

志季は心底嫌そうな顔をする

「どう？私達に協力し「遠慮します」…ならしょうがないわね」

女性2人の片方がハンドガンのようなものを取り出す

「ハンドガン？…いや、違うか…随分非道な手を使うんですね」

「一目見ただけで分かるなんてさすがねっ！！」

女性が志季に向かって連続で発射する

志季はサイドステップで避けながら接近してハイキックを放つ

しかし女性の体に機械が展開され、腕で防がれる

「ISか…」

志季はバック転で距離を取り、つぶやく

「降参してくれないかしら？勝ち目はないと思うけど…」

「あなた方の道具になんてなりたくない!!」

女性がソードを振るうのをしゃがんでかわしながら答える

女性がまたハンドガンのようなものを発射しようとするが、志季は即座に反応しそれを蹴り飛ばす

「うぐっ!!」

志季は相手がひるんだ一瞬を逃さず、装甲のない体の腹に1撃いれる

「IS相手に生身でここまで戦うなんて…」

もう一人の女性が言葉をもらす

「痛いじゃないの……男ごときが調子に乗るなあああ!!」

ISを装備した方が一瞬で志季の目の前に移動する

イグニッション・ブースト
「瞬時加速かつ!!」

志季に向かってソードが振り下ろされる

志季は突然の攻撃に反応出来ない

「死ねえええええ!!!!!!」

『ガキンっ!!!!!!』

「まったく、冷静になりなさい、殺してどうするのよ」

先ほどまで見ているだけだったほうの女性がISを展開し、防いでいた

「ちっ！！」

切りかかった方の女性が不満そうにISをもどす

「志季くん怪我はない？」

「へ？…ああ、はい…っ！？しまっ！！…た…」

志季は声をかけられ返事をしてもう一人の女性の方を見ると、光が襲う

……そして光がおさまる

とつぜん志季がめまいでふらつく

「おっと」

光を放った女性が即座に支える

「すみません…」

志季から抑揚のない言葉が発せられる

「いいのよ、大丈夫？」

「はい」

志季の目には感情が失われていた…

「IS 適性のある天才の男の子…楽しみね」

女性は妖艶な笑みを浮かべ、志季のことを抱きかかえて空へ飛び立つた

Ⅱ 1 脱出Ⅱ（前書き）

ひさびさの投稿です

ちよっとグダグダで読みにくいかも？

「1 脱出」

「し……！！し……ん！！起きて！！しーくん！！」

「おわっ！！」

志季が飛び起きる

「しーくん、大丈夫？」

ディスプレイの向こうで束が心配そうに志季を見ている

「あ、うん、大丈夫……いろいろ思い出しただけ……」

「そっか……ごめんね、私がもう少し警戒してれば……」

「ホントだよ、なんでこんな施設一つ完全ハッキングするのに一年もかかってるの？」

「うわっ！！ブロックしてた本人がそれを言うの！？で、でも本人の意思じゃないから責められないー」

「ははっ、冗談冗談、それより時間が無いんじゃないの？」おねーちゃん”？」

「おっ、その呼び方懐かしいねしーくん！！よし！！じゃあ、しーくん救出作戦開始！！」

束が楽しげに宣言するとさっきまで開かなかった扉が開く

志季は素早く扉の脇に移動し、外の様子をうかがい、誰もいないことを確認すると静かに部屋の外を出る

「そういえば、しーくんあのペンダント持ってるよね？」

「バッチリ持ってる」

志季は走りながら首から下げているシルバーでダイヤ型のペンダントを一瞥すると、口早に答える

「よかった！！作戦通りいけそう！！…あ、次の角右その先に１人いるよ」

「了解」

志季が角をスピードを落とさずに曲がるとその先にライフルを持った男が居た

「なっ！？どうしてお前が！？」

「くっ、よりによって警備兵か」

男がライフルを発砲する

志季は体をかがめてかわすと横の壁を蹴って、男のあたまに空中回し蹴りをたたきこむ

「さすがしーくん強い！！」

「まあこつちきてからはもっぱらISとプログラミングと戦闘訓練だったからね」

志季が苦笑いを浮かべ、再び走り出す

「この先の角を左に曲がったらエレベーターに乗ってね」

志季は息切れもすることなく走り、エレベーターに駆け込む

「操作お願い」

「ラジャー」

エレベーターは上に動き出す

しばらくしてエレベーターは停止する

「しーくん隠れて!!」

「危なっ!!」

志季はドア横のスペースに隠れる

すると銃弾が飛び込んでくる

「しーくんどうする!!?」

「どうしよう…手詰まりだ」

突然金属の転がる音がする

「！？…グレネードかつ！？」

志季はどうすることもできず体をかがめる

そしエレベーターの外から強い閃光が放たれる

「志季！！今のうちに行きなさい！！」

女性の声が響く

「しーくんエレベーターを出て右だよ！！」

志季はなりふり構わず走る

聞き覚えのある…1年前のあの日、志季を洗脳した張本人の声に疑問を抱いて…

「ここを真っ直ぐ行ったら外だよ！！」

「了解！！」

志季はラストスパートをかけ、スピードを上げ外へと飛び出す

「…えと…こつからどうするの?」

「大丈夫だよーくん、ちゃんと考えろ!?!?…来るっ!!」え?」

志季は前に転がる

すると、志季がいたところをビームが通過する

「やっぱりか、ISが来るとやっかいだな…」

志季は辺りを警戒しながら呟く

「大丈夫だよーくん」

「どういうこと?」

「だからさつきちゃんと考えてるって言ったじゃん、ちょっと待ってて…よし!!えいつ!!」

『防衛ロックプログラム解除、稼働モード移行中、キサラギシキ本人を確認……起動』

突然首から下げていたペンダントが光り、変形して逆三角形になり、下の角から等角に赤と黄色のラインが伸びる

「!?!?まさか!?!」

「そう!!そのまさかだよ ほらほら早速!!」

「わかったから、そう急かさないでよ」

「しーくんだったら1秒かからず展開できるくせに……ってもう展開してるし」

志季の体にはグレーを主体に赤と黄色のラインが入った4枚のウィングの付いたISが展開されていた

『熱源6確認……』

「フォーマットとフィッティングやってないのに6機もか……」

「それなら終わってるから大丈夫だよ」

「?…なんで初めて展開したのに既におわってるの?」

「まあそれは置いて先に逃げなきゃ」

「ねえ…なんでこの機体こんなに情報提供が少ないの?レーダーの範囲は狭いし、来る情報といえば熱源の数くらいじゃん」

「戦闘能力ばかりに集中してて、プログラミングするの忘れちゃった」

「ちよっ…あぶなっ!」

志季は遠くから高速で飛んできたエネルギー弾を後ろ向きに1回転してかわす

「おおー!…、しーくんすげー!」

「すごい！……じゃないよ！！これせっかく機体性能高いのに普通のパイロットじゃすぐ落とされちゃうよ！？……とりあえずここは早くにげないと」

志季は海の方へ急発進すると低空飛行で飛ぶ

「おー、速いねしーくん」

「さつきから聞いたかったけどその通信機機動力高くない？」

「まあね、束さんの最新作だからっ！！それよりまだ6機付いてきてるよ？」

「1度見つかっちゃってるから、撒くのはキツいな……」

「しーくん前方から急接近してくるISがいるよ！！！」

「このレーダーどんだけつかえないんだよっ！！！」

そして志季の前方からエネルギー弾が6発飛んでくる

志季は右に急旋回して回避行動をとる

「ん？何か様子が変わだな」

弾は全く志季の居たところを通過していない、むしろ当たらないような位置を高速で通過していった

「……どういうことだ？」

弾は後方で追跡してきていた6機のISに直撃した、と同時に前方から1機のISがやってきた

「志季、そう警戒しないでよ……っていうほうが無理か……」

「どういうつもり？さっきのエレベーターの

時もそうだし今だって、クロイア、あなたは施設の人間でしょう？」

そのISに乗っていたのは1年前、志季を洗脳した本人だった

「私は元々あそこの人間じゃなかったの、一部目的が一致していたから協力していただけ」

「目的？」

志季は訝しげにクロイアを見る

「……私、前から……志季に興味があつて……」

クロイアはもじもじしながら告げた

「……………は？」

「信じてくれなくてもいいけど、私は志季の味方だからねっ……！」

クロイアは志季にウィンクすると急上昇して雲の向こうに消えていった

「何だったんだ？……ん？……そっいえば施設の時……」

突然志季は顔を赤くする

「あれ？しーくんどうしたのかな？」

「な、何でもない！！……ぶつぶつ（アイツう洗脳してるのをいいことにいー！）」

「しーくんそろそろ逃げたほうが…あっ」

束の通信機が煙をあげ始める

「ああ、さすがにしーくんの専用機について行くのは無理があったかあ」

「えっ？ちよつと？」

「ごめんしーくんこれこわれちゃう、なにせしー……専……は……」

「うわっ！ー！」

束の通信機は爆発して落ちていった

「こっから…どうしたら…いいんだ…？」

「確かここはフランス沖だったはずだから…方角は…あっちが北か…とりあえず陸地をめざしながら、ハッキングして警備に穴をつくっておくか…」

志季は空高く飛び去って行った

「2 出逢い」(前書き)

原作を知っている方へ

今回出てきた原作キャラの一人称は誤植じゃないです

「 2 出逢い 」

「まだ残党がいたなんて…もうつ!!」

1人の少年が細い路地を走り抜ける

「B - 4 8 7 おとなしく私たちと来なさい!!」

「如月志季だよ!!その名前で呼ばないで!!」

「こつちだよ!!」

突然曲がり角の向こうから女の子の声が聞こえる

「畏?...いやそれは...考えてる暇はないね」

志季は声が聞こえた角を曲がる

すると曲がったすぐの所の家の扉が開いていて、黄色髪の子が顔を出していた

志季は迷わずそこに飛び込む

「早く奥に!!」

「うん!!」

2人は床下に隠れた

「もう行っ たみたいだね」

「うん、助かったよ、ありがとう、えっと…?」

「シャルロット…シャルロット? デュノアだよ」

「ありがとうデュノアさん、僕は如月志季だよ」

「シャルロットでいいよ」

「わかった、僕も志季でいいよ」

「志季って…男の子…?」

「そっだよ!!」

「そ、そっだよね!! ちょっと…女の子にも見えなくもなかったか
らな」

「本当の所は?」

「女の子に見えました…あっ」

「うぐっ…」

「い、いめん」

「ああ、でも男だつて見抜いたのは家族以外じゃシャルロットが初めてだよ!!」

「そうなんだ、大変だね…」

「うう…まあそれは置いて、本当に助かったよ、ありがとう、何かお返しがしたいんだけどな」

「いいよ、たまたま見かけたからなんだし…そういえばなんで志季は追いかけてたの？」

「詳しいことは言えないけど、ある施設から逃げてきたの、昨日」

「ええーっ!?!…このあとどうするの?」

「うっ…痛いところつくね」

「それなら家に来る?」

「えっ?悪いよ!!それにシャルロットを巻き込むわけにはいかな
いし」

「いいのいいの」

「でも…」

「じゃあ、お返し」

「へ?」

「私が志季を助けたお返し」

「ダメだよ、また迷惑かけるからお返しには…」

「いいの！！私は志季に来てほしいの！！」

「は、はいっ！！！！」

「ここだよ」

「お、大きい…もしかしてデュノアってあのシェア3位の量産型ⅠS製造してるあの？」

「うん、そういうこと…」

シャルロットは一瞬暗い顔をする

「あ、ごめん無遠慮だったね」

「えっ！？…う、ううん大丈夫！！さ、入ろ？」

「うん、1人で抱えすぎないでね」

志季は小さな声でささやくと入っていく

「えっ……」

シャルロットはしばらく茫然としていた

「シャルロットー？」

「ふえ？…ああっ！！今行くー！！」

シャルロットは何か決意したような顔で志季の後を追いかけた

「はい、紅茶」

「ありがとう」

「……」

シャルロットは黙り込んで、チラチラと志季を見ている

「あ、あのね…」

「ん？」

「私…本当は愛人との間の子なの、でもお母さん死んじゃって、こっちに引き取られて…この間一度本邸に呼ばれた時なんて本妻の人に泥棒猫の娘がつ…！って殴られちゃったよ…ははは…ごめんね、なんで志季にこんなこと話してるんだろ、迷惑だよ…本当…あはは」

志季は微笑んでシャルロットの頭に手をのせる

「シャルロットは強いんだね」

「え？」

「そんな辛いことがあっても、逃げ出さないし、1人で耐えられるなんてさ…でもさこのままじゃシャルロット壊れちゃうよ」

「うつ…うつ…」

シャルロットの瞳から雫が流れ落ちる

「これから、いつでも、どこに居たって、僕だけはシャルロットの味方だから…」

「うつっ…うん…うわああああん」

シャルロットは堰を切ったように泣き出す

志季はシャルロットを抱きしめた

「ありがとう…志季…」

「気にしない気にしない、そういえば僕がいるのって本当に大丈夫なの？上手く連絡が取れなかったら、いつまでになるか分からないよ？」

「そこは任せて下さい」

1人のメイド服を着た女性が入ってくる

「私、メイドのローナ？リユニースと言います」

「ローナさんは家のこと全般をやってくれてるんだ」

「私が本邸の方には上手く繕っておきますので」

「お手数おかけします、僕は如月志季です、これからお世話になります」

「それより、お嬢様はそろそろISの演習が」

「あ、そうだった！…！それと、私のことはシャルロットでいいっていつも言ってるでしょ？」

「しかし…」

「部外者が言うのもあれですけど、本人が呼んで欲しいって言ってますから、いいんじゃないですか？」

「ならば、志季様が私へ敬語をやめて頂ければそういたしましょう」

「えっ！？…まあいいです…いいよ？」

「じゃあ私はシャルって呼んで！！」

「え？だってシャルロットは関係n「ダメなの？」「うっ」

シャルロットは目に涙を浮かべて志季を見つめる

「分かったよ…」

「やった！ーじゃあいつてくるね」

「いつてらっしゃいませ」

「気をつけてねー」

「はい」

シャルは元気よく出て行った

「志季様ありがとうございます」

「え？何が？」

「シャルロット様のあんな明るい姿をみたのは久しぶりです」

「僕は大したことはしてないよ、それと、ローナさんももっとシャルに親身に接してあげてね」

「え？」

「僕もいつまでもここにお世話になるわけにはいかないし、1人より2人、多いほうがいいでしょ？」

「しかしメイドが馴れ馴れしくするわけには…」

「シャルが馴れ馴れしくするなって言ったの？」

「い、いえ」

「それともローナさんはシャルと仲良くしたくないの？」

「そんなわけありません！！」

「なら決まりだね！！」

「はい！！」

夕方、シャルの家からいい匂いが立ちのぼる

「ただいまー！！」

「おかえりー（なさい）！！」

「あれ？今日はいつもと感じが違う？」

「おっ！！分かった？夕食、僕とローナさんで作ったから」

「志季様はとても料理が上手なんです、私も勉強になります」

「とりあえず食べよう、上手く出来るといいけど」

「わっ！！今日の夕食はローナさんも一緒に食べるんだね」

「」迷惑でしたしょうか」

「全然そんなことないよ、これから一緒にいいよね？志季？」

「もちろん、さ、食べよう」

「」いただきます！！」「」

「どうかかな？」

シャルとローナは料理を口に運ぶ

「凄く美味しいよ志季！！」

「はい、こんな美味しい料理は初めてです」

「そっかあ、良かった」

「志季様！！今度私に教えていただけませんか？」

「あつ、私も教えて欲しいな」

「じゃあ今度みんなで作るっか、シャルのほうは今日だった？」

「えつとね……………」

そんなこんなで初日の夜は賑やかに過ぎていったのだった…

Ⅱ 3 別れⅡ（前書き）

今回少し展開が早いかもです

「 3 別れ 」

あれから、1カ月たった

志季、シャル、ローナの3人は家族のように打ち解けあつて笑顔の
絶えない日々を送っていた

「志季様、志季様に電話ですよー!!」

「えっ！？僕に!?!」

「はい」

「もしもし、如月です」

「志季か？」

「えっ！？千冬さん？」

「志季、志季なんだな!?!」

「はい!!」

「そつか…無事でよかった」

「心配かけてすいません」

「全くだ」

「うう、ごめんなさい」

「まあ、無事だったからいいさ」

「ありがとう、ちーちゃん!!」

「な、懐かしい呼び方だな、どっかの兎は未だに呼んでるが…」

「僕が呼んでも怒らないんだ」

「い、今だけ特別だ!!…それより、もう一つの本題に入ろう、志季、IS学園に入らないか？」

「僕が!?!もしかして使えるのバレた!?!」

「いや、それはないが、一応お前追われてる身だろう?こっちのほうは安全だ」

「でも、男がIS動かしたら問題じゃないの?」

「それがだな、一夏がISを動かした」

「……………は?」

「だから、一夏がISを動かした」

「なんで男なのにIS動かせるの?」

「おーい、お前はどつなんだ?」

「でもさあ、一夏は今、”公式”では世界で唯一ＩＳを動かせる男
ってことでしょ？」

「ああ、そうだな、まあ公式発表は明日だが」

「そういうことねえ、……………しょうがない、ちーちゃんの頼み
だもんね」

「話が早くて助かる、明後日そっちの最寄りの空港まで迎えに行く」

「うん、分かった、またね」

「ああ」

志季はゆっくりと受話器を置く

「そっか……………一夏がねえ……………」

「志季いー！！夕飯だよー！！」

「はいー！！今行く！！……………シャルは、大丈夫、かな……………」

志季はシャルに返事をしてから、小さな声で呟くとゆっくりと食卓
へ向かっていった

「2人に言わなきゃいけない事がきたんだけど」

夕飯後に志季が切り出す

「僕、明後日、日本に帰らなきゃいけなくなっちゃった」

「……そっか」

「ゴメン……」

「なんで謝るの？志季やつと帰れるんだよ？」

「シャルの力になるって決めたのに……」

「十分だよ！！ローナも前より親身な態度になってくれたし！！味方がいるって思ったら、頑張れるよ！！」

「でも……」

「志季はどこに居たって私の味方なんでしょ？私は大丈夫！！」

「そっか、ならいいんだ……そういえば、明日はISの演習無いんだよね？」

暗い顔をしていた志季だったが、何か思い立ったようにシャルに尋ねる

「うん、そうだよ？」

「ローナさん、パソコン借りられます？」

「ええ、大丈夫ですが？」

「じゃあシャルのIS一旦明日だけ預かってもいい？」

「いいけど、どうするの？」

「それは後のお楽しみ、大丈夫、悪いようにはしないよ」

志季は不敵な笑みをうかべた

翌日、志季は部屋にこもって、パソコンのキーボードをものすごいスピードでタイピングしていた

「あとは、ここをこうして…この値を調節して…よし…！…こんなもんかな…！」

突然、ドアがノックされる

「はーい？」

「志季？入ってもいい？」

「おっ、シャル、ナイスタイミング…！どうぞどうぞー」

ゆっくりとドアを開いて、シャルが部屋に入ってくる

「はい、借りてたIS」

「あれ？待機状態の形が全然違うよ？」

「シャル専用に使がカスタマイズしといた。仮名でラファール・リヴァイブ・カスタム？って呼んでる。かなりラファールリヴァイブと違うものになってるけど、シャルの戦闘データを僕なりに研究したから、力になってくれると思うよ。いくら性能がいいとはいえ量産機だし、第三世代も出てきてるからね、それに何かシャルに残したくて…起動すれば大体分かんと思うけど、一応スペックはこの紙にまとめといたよ」

志季はシャルに紙を手渡す

「あ、ありがとう…えっ！？これカスタマイズっていうレベル越えてるよ！？」

「データを見る限りシャルは操作も上手いみたいだから、多分第三世代にも引けを取らないと思う」

「志季ってIS詳しいんだね」

「ま、まあね…」

「まあ、深くは聞かないよ」

「あ、ありがとう」

「でも、会ってそんなに経ってない私にこんな味方してくれるの？」

「まあ始めは助けてくれた恩返しのもりだった」

「うん」

「でも、僕って昔、まず小さい頃にある理由でドイツの研究所に売られて、そこから助けられたと思ったら、助けてくれたのがもつとたちの悪いラボでさ、酷い実験されたよ…ドイツではまだ友達いたんだけど、その後は騙された上に酷い実験されたから人間不信になつて、孤独だった。その後はいろいろ運とか人にも恵まれたから、今こうして元気だけど、どうしても一人でもがいてる人はほっておけなくて…」

「そっか…」

「それに、特にシャルは優しくてかわいいいね！！なんとかしてあげたいって思っちゃった」

志季はシャルに笑いかけ言う

「ふえっ！？／／／…かわいい…／／／／／」

「シャル？」

「えっ！？…ああ、なんでもない！！なんでもないよ！！」

「よし！！今日は２人で夕飯作るっか」

「ホント！？やった！！よし！！早くいこ！！」

「ちよっ！！待ってよ！！」

2人はキッチンに向かって走り出した

2日後…

「志季、元気だね」

「志季様、お氣をつけて」

「うん、2人もね…ローナさん」

「はい」

「シャルを頼んだよ」

「おまかせください!!」

「シャル、君は1人じゃないよ、味方がいるってこと、忘れないでね」

「うん」

「シャルのピンチは絶対、僕が助けるから」

「わかった、信じてるよ」

「絶対また会えるから…案外すぐかもね」

「そうだいいな」

「……じゃあ、”またね” 2人とも」

「「うん（はい）！！！」」

志季は2人との別れを終えると、振り返らず走って行った…

「 4 始まり」(前書き)

今回かなり短いです

Ⅱ 4 始まりⅡ

志季が空港で待っていると懐かしい人がやってきて、辺りを見回す

「こつちです!!」

志季はその人物に声をかけ手を振る

「おお、待たせたな」

「大丈夫です、千冬さん、そういえばチケットとかパスポートは？」

「きちんと用意してあるから大丈夫だ、志季は準備は平気か？」

「うん、バッチリ」

「じゃあ、行くか」

2人は東京へと向かっていった

こうして、ようやく志季は日本へ帰っていったのだった

「帰ってきて早速で悪いが今日からもう始業日なんだ」

「日程と着く時間的にそんなこつたろうと思ってました」

「じゃあISS学園向かうか」

「あれ？その前に制服にきがえなくていいの？」

「む、それもそうだな」

「トイレで着替えてくるよ」

志季は千冬から制服を受け取ると、最寄りのトイレで着替え、出てくる

「ちよつとアンタ、荷物持ちなさいよ」

見ず知らずの女性が偉そうに志季に命令して来る

「僕急いであるので、失礼します」

「はあ？男は黙って女に従ってなさいよ！！私の命令が聞けないわけ？」

「……（全くたちの悪いのに捕まったなあ、ISできてから女尊男卑になってめんどくさいこういう人がでたのがダルいなあ）」

「私の連れを煩わせるのはやめてくれないか」

千冬が間に入ると女性は舌打ちをして罵声を放ちながら去っていった

「助かったよありがと」

「全く、あの手の輩は困ったものだな」

2人は呆れつつ再びIS学園に向かっていった

40分くらい電車を乗り継ぎ、IS学園に到着した

「じゃあ、改めてよろしくお願いします、先生」

「ああ、こちらこそな」

「やっぱりIS学園は大きいな」

「おいおい、この程度で驚いてたら、エネルギーシユな女子高生どもについていけんぞ?」

「はは、まあ頑張るよ、でもそういうのは一夏の担当じゃない?」

「まあ確かにそうだが、志季も顔整ってるだろう…女っばいが」

「それは言わない!!」

「ははは、でも志季も覚悟はしておくべきだと思っぞ?」

そんなことを話していると教室に到着する

「じゃあ、私が呼んだら入ってこい」

「はい」

千冬は教室に入っていく

数秒後、男の声が聞こえたかと思うと、スパアァン！！とものすごい音が響く

それを聞いて志季は思わず苦笑いする

その直後、黄色い悲鳴が響き志季は思わず耳を押さえた

その後千冬の声で静かになる

志季はそろそろかと身構える

「志k…如月、入ってこい」

案の定呼ばれ、内心で呼び方苗字に直す意味あったかな？とツッコミつつ扉の前に立ち、深呼吸すると、ものがたり教室の扉を開いた…

「 5 過去への回想 p i e c e 1 」

「うっ…くっ…はぁはぁ…」

小学校1年生くらいの子供が傷だらけで意識も朦朧に歩いている

「ぐっ…」

そしてそのまま道に倒れる

そこへポニーテールの同年代の女の子がやってきた

「ん？…お、おい！！大丈夫か！？しっかりしろ！！」

「うっ…」

「良かった生きてる！！君、立てるか！？」

女の子は倒れている子を立てるように支える

「軽いな…家まですぐだから、少し頑張れ」

「うっ…うん？…ここは？」

「目、覚めたか？ここは、私の家だ」

「ああ…僕、君に助けてもらったんですね、ありがとうございます」

「た、大したことはないさ」

女の子は恥ずかしいのか顔を赤らめる

「君、名前はなんて言うんだ？」

「僕は如月志季、7歳です…君のを聞いても？」

「ああ、私は篠ノ之箒だ、私も7歳だ…あつ、そつだ」飯が出来てるんだが食べるか？」

「食べたいつ…！…あつ、すみません」

「あつはははは…！…そつちが素なのか、別に気をつかわなくてもいいぞ」

「そ、そつ？」

「ああ、ほら、食べると良い」

「ありがとうございます」

その後2人は意気投合して仲良くなった

その夜…

「……トイレどこだろう?」

志季は夜中、トイレを探しに部屋を出た

「暗い……ん?あそこの部屋だけ灯りがついてる」

志季は吸い込まれるようにその部屋に入ってしまった

中では少女がパソコンを前にキーボードを打ち、周りには資料が散乱している

志季はパソコンの脇の資料を見る

少女は志季のことを気にもとめず、キーボードを打ち続けている

「これは!?!す、すごい…」

「うわー!?!」

「うおっ!?!な、何!?!?」

「どうしても、ここが上手くない!?!」

志季はディスプレイを見る

「あれ?…ちょっといいですか?」

「……何?」

少女は不機嫌そうな声を上げる

志季はキーボードを打ち始める

「ここを、こうして…これがこうなるから……よし、これでどうでしょうか？」

「おおっ、そっかそっか！！なるほどね！！…スゴいね！！君！！名前なんて言うの？」

「如月志季です」「しーちゃんだね」「しーちゃんって何ですか！？それに僕は男の子ですっ！！！」

「おおっ！！？男の娘キター！！！」

「それで、あなたの名前は？」

「東だよ お姉ちゃんって呼んでね！！！」

「は、はあ……」

「やったよ、かわいい弟と優秀な助手さんができたよ！！ありがとう！！！」

「できることはやりますけど、その前に……トイレどこですか？」

「するの、手伝ってあげようか！？」

「場所だけ教えてください！！！」

そんなこんなで志季は篠ノ之姉妹の家にお世話になることになった

篠ノ之宅は剣道場兼神社で、姉妹の父親が剣道場をやっている

今、志季は箒に連れられて、その道場に来ていた

「一夏!!」

「おう、箒…あれ？そっちは？」

「僕は如月志季です、訳あってここにお世話になってます」

「そうか、俺は織斑一夏だ、よろしくな」

「はい」

「ああ別に敬語は使わなくていいぞ、気軽に一夏って呼んでくれ、そのかわり、俺も志季って呼んでいいか？」

「うん、改めてよろしく一夏」

「おう!!」

それから、志季は2人が稽古をしているのを見学していた

「志季、志季もやってみるか？」

「一夏が声をかけてきた」

「えっ！？…うーん、やってみたいけど、危ないかも…」

「大丈夫だつて、防具つけるんだし」

「いや、でも」

「おっ！！面白そうなことになってるね！！」

「「束さん（姉さん）！！？」」

「珍しいですね、束さんが道場に来るなんて」

「いっちー、しーくんに舐めてかかっちゃだめだよ」

「しーくん？」

「…僕の事です」

「ああ、志季のことか…舐めてかかっちゃだめって…」

「詳しいことは言えないなー、しーくんちょっとだけやってあげて、そうもしないといっちー納得しないし」

「うん、分かった、じゃあ少しだけね」

志季はそのまま竹刀を持って一夏に向かいあう

「僕はいらないよ」

「くそ、ケガしても知らないぞ」

一夏が志季に素早く切りかかるが、志季は軽くバックステップで避ける

志季は軽く避けたが、一夏のスピードはこの年齢にし十分早い

「おお、一夏やるねえ」

「軽く避けといて何言っただよっ!!」

一夏が突きを入れるが志季は体を最低限にひねりかわすと、また少し距離を置く

「あの動き…凄い…」

「さすが、しーくんだね」

その後10分一夏が何度も切りかかるが志季は全てかわす

「はあはあ…くそっ…触れることさえできねえ」

「ここら辺で止めとかない？」

「志季に触れるまで、諦めねえ!!」

「うーん…」

また一夏が切りかかっていく

「ならしょうがないか…」

志季の姿が一瞬ぶれた瞬間…

「面…!」

「へ？」

「す、すごいスピードだ…」

一夏が気が付いたときには、志季はすでに残身を取っていた

「は、早い…」

一夏と箒が呆氣にとられ、言葉が出ない

その沈黙を破ったのは…

「スッゴいよ!…!しーくん!…!」

「うわっ、抱きつくな!…」

「カッコいいしーくんもいいけど、やっぱりしーくんはかわいいね
」

「ちよっ…やめっ!…」

そんな様子を見て、一夏と箒は思わず笑ってしまっ

「おねーちゃんって、意外と気が利く？」

そういうと束は一瞬優しい表情に変わり

「あの子たちがいい子だけだよ」

というとき再び志季を抱きしめた

「ほんとかわいいねしーくん、本当に男の子?」

「**全くだ**」

「だからそうだって言ってるじゃん!」

「は？」

「どうしたの？一夏？」

「今、志季が男の子って……」

「いや、だからそうだって!!」

「志季が…男…って、ええええええ！……！！！」

「一夏までえ……」

「でも志季本当強いな」

「昔いろいろあってね…僕とやりあえる同年代の人って今まで1人

しか居ないし」

「ひ、1人…」

「でも一夏も強いと思うよ、その1人には技術では確かに負けてるけど、一夏にはその子に無いものを持つてると思うから」

「無いもの？」

「そう、それは自分で気づかなきゃ」

「そうか…俺、頑張るよ!!」

「うん!!」

そんなこんなで、志季は一夏と篤、束と出会ったのだった
今回はここまで、他の昔のお話は、また別の機会に…

「 6 再会と出会いと… 」

志季が教室に入ると教室に入ると教室中の視線が志季に向けられる

『ガタツ！！！』

「「志季っ！？」」

教室の正面中央のただ一人の男子生徒と窓際の女子が一人突然立ち上がる

「やあ、一夏、箒」

「その2人、座れ…如月も早く自己紹介しろ」

千冬の指示で2人は座る

「如月志季です、特技は機械関係と武術…かな？まあいいや、特別苦手なものはないです、よろしくお願いします」

パチパチと拍手が起こり、志季は笑顔でお辞儀する

「おい、きさ」…もう言いにくいからいいか、志季」

「はい？何ですか？」

「何ですか？…じゃない！！全く、一番大事なこと言わなくてどうするんだ！！」

「ふえ！？…大事なの？…ああ、はい、えっと、僕、男です」

教室が時間が止まったように静かになり……

「……きゃあああ！！！！！！！！！！！！！！」

「うわっ！！な、なにっ！！？」

「はあ……またか……全く……」

突然の悲鳴に志季は飛び上がり、千冬は呆れかえる

「可愛い！！」

「女の子みたあい!!」

「ああいう男の子もいい!!!」

「リアル男の娘……おいしそう……じゅる……」

クラスの女の子たちが口々に歓声を上げる

「ひいっ！！（なんか今寒気が…）」

「静かにしろ!!」

千冬の一声でまた教室は静かになる

「志季、空いてるとこに座れ」

「はい」

志季は席につくと隣のぼわぼわした雰囲気の子が話かけてきた

「しつきい、私は布仏本音だよ、よろしくね」

「し、しつきい！？…まあいいや、よろしくね布仏さん」

「むっ！！しつきいもあだ名でよんでよお！！」

「えっ！？…いきなり言われてもなあ…ううん…のほほんは一夏がいいそうだしなあ…ほん姉とか？うーん、でもお姉ちゃんって感じじゃあ…」

「お姉ちゃん…お姉ちゃん…ふふっ…ふふふっ…私がしつきいのお姉ちゃん…」

「えっと…お姉ちゃん…がいいの？（布仏さんってこんなキャラだったの！？）」

それからしばらく本音はトリップして戻ってこず、結局あだ名はほん姉になったのだった…

そうこうしているうちに、副担任の山田麻耶先生の授業が始まった
基礎的なことだったので、志季にとっては復習でしかなく、割と余裕だった…

一夏はキヨロキヨロと回りを見回しては落胆している

（一夏、もしかしてついていけてない？配られた参考書読めばある程度ついていけるとは思うけど）

「織斑君、どこか分らないところがあつたら気軽に先生に質問して下さいね？」

麻耶はえっへん！といった感じに言うが、見た目的にはなんとも頼りない…

「せ、先生…」

「はい、何ですか？織斑君」

「ほとんど全部分かりません…」

「えっ、ええっ！？…ここまでで、分からないことがある人居ますか？」

しかしその問いかけに手を上げる生徒は居ない

そこで見かねた千冬が一夏のほうへある行っていく

「織斑、参考書は読んだか？」

「ああ、あの分厚いやつ…は…電話帳と間違えて捨てました」

『ガンッ』

千冬の出席簿が炸裂する

「再発行してやるから、一週間で覚えろ」

「いや、あれを一週k」「やれと言っている」「…はい、やります」

「志季!!」

「あつ、箒」

箒とは一夏と同じく

「戻ってきていたなら、連絡くらい寄越せ!!」どれだけ心配したと思ってるんだ!!」

「うう面目ないです…でも束さんから連絡行ってるかと思って…」

「志季!! 無事に帰ってたのか!?!」

「あ、一夏、うん、何とかね」

「ちょっとよろしくて?」

「ん?」

「何かな?」

話しかけてきた相手は、ロールがかった金髪でブルーの瞳、その雰囲気は志季が空港で絡まれた人ほどではないにしても、いかにもといった雰囲気だった

「まあなんですの！！そのお返事、私に話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるのでは無いかしら？」

「それは失礼したね、セシリア・オルコット、代表候補生が何か用？」

「あなた……分かっていてその口調も「志季、代表候補生って何？」なっ！？」

「一夏、お前はバカなのか？」

「何だよ第まで」

「あはは、一夏は家のことで忙しいもんね、えっとね、簡単に言うと、国代表のIS操縦者の候補の操縦者ってとこ、まあ文字から連想すれば分かるけど」

「そう！！エリートなのですわ！！」

セシリアはびしっと一夏に人差し指を向ける

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ」

「そうか、それはラッキーだ」

「馬鹿にしていますの？」

「そちらのかたはともかく、あなたはISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね、唯一男でISを操縦できるときいていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「ふん、まあでも？私は優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

（（全然優しくない（だろ）））

「ISでわからないことがあれば、まあ泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ、何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は？」

「へえ、一夏すごいじゃん！」

志季がほめると一夏が顔を近づけ

「まあ倒したっていうか、いきなり突っ込んできたからかわしたら、勝手に壁にぶつかってそのまま動かなくなっただけなんだけどね」

と、小声で言った

「わ、私だけと聞きましたか？」

「女子ではっていうオチじゃないのか？」

「つ、つまり、私だけではないと…？」

「た、たぶん」

「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」

「お、落ち着けよ！！…そ、そうだ、志季はどうだったんだ？」

「僕？僕はやってないけど？」

「は？」

「いや、最初は僕もやると思ってたんだけど、千h…織斑先生に「志季の実力は私が認めているからやらなくていい」って言われて…」

「あなた！！それどういうことですよ！！？」

「どうもこうも…そのままの意味だと思うけど」

そこに休み終了のチャイムが鳴る

「っ……！！また後で来ますわ！！逃げないことね！！よくって！！」

そっぴい残し、セシリアは去っていった

「はあ、面倒な予感しかしないよ」

「俺もだ…」

2人は筭を見る

「わ、私にはどうすることもできないぞ？」

「ですよね…はあ、あつ！！2人とも早く席戻らないと」

一夏と筭は急いだ席に着くと同時に千冬が入ってきてはあっと息をつくのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4340x/>

陰から光へ放り出されて...

2011年12月21日14時55分発行